

二〇〇〇年の時を越えよみがえる弥生の丘

国指定史跡 古津八幡山遺跡

— 弥生時代から古墳時代への移り変わり —

古津八幡山遺跡は、信濃川と阿賀野川に挟まれた新津丘陵上に立地する弥生時代後期・終末期（西暦1世紀～3世紀中頃）の大規模な高地性環濠集落です。集落は標高約50mの丘陵上にあり、途切れ途切れですが、周囲に濠をめぐらしています。この環濠に囲まれた範囲は南北400m、東西150mほどです。部分的な発掘調査ですが、竪穴住居が63棟、方形周溝墓・前方後方形周溝墓などが見つかっています。

集落が途絶えてから150年程度の古墳時代中期（西暦5世紀）には新潟県内最大級の古津八幡山古墳が築かれています。

古津八幡山遺跡は、弥生時代後期から古墳時代にかけての社会情勢や変化を示す貴重な遺跡として、2005年に約12haが国の史跡に指定されました。また2011年には、古墳が追加指定されています。

高地性環濠集落
 高地性環濠集落とは、丘陵や低い山地に造られ、周囲に濠をめぐらせた集落のことです。

弥生時代後期になると平地から30m以上高い丘の上にムラがあらわれます（高地性集落）。水稲耕作に不向きなこと、周囲を濠で囲んでいる集落（環濠集落）があることから、中国の歴史書『魏志倭人伝』に書かれた「倭国乱」と関連づけて、戦いに備えた防衛的集落と考えられています。

古墳時代になり争い事が収まると、ムラは丘の上から水田管理がしやすい麓に住まいを移しました。

発掘調査と復元整備
 1987年の第1次調査から2021年の第24次調査まで発掘調査を行ってきました。2007年からは遺跡の内容が明らかになった部分から史跡整備に着手し、竪穴住居7棟・環濠と土塁・方形周溝墓・前方後方形周溝墓などを復元し、2014年には古津八幡山古墳の復元整備が完了しました。

年代	特徴	
旧石器時代	市内最古の石器が残される	
縄文時代	草創期	
	早期	
	前期	東側の谷でクリやトチの木の手入れがされる
	後期	北東地区で竪穴住居が見つかる
弥生時代	前期	
	後期	丘の上に濠が掘られ、ムラがつくられる 四角い墓にムラ長が葬られる
古墳時代	前期	
	中期	県内最大級の蒲原の王墓が見つかる
	後期	
飛鳥時代		
奈良時代		
平安時代	炭灰で炭が焼かれ、製鉄炉で鉄がつくられる	
鎌倉時代		

蒲原の王墓 古津八幡山古墳



新潟県内最大級の古墳
 直径60mの県内最大の円墳で、墳丘斜面中ほどには幅4～5mの平坦面（テラス）がめぐっています。また、南西側には最大幅13m、深さ4mの巨大な濠（周濠）が見られます。

蒲原平野を一望でき、また平野からも望むことができる丘陵の先端を選んで古墳は築かれています。

※蒲原平野 国土地理院の地形図には用いられていませんが、ここでは信濃川・阿賀野川の下流域に広がる西蒲原・南蒲原・中蒲原・北蒲原の一部など「蒲原郡」と呼ばれた地域を指す地名として用いています。

古墳の造り方
 古墳の墳から頂上までの高さは最大で6.8mもあります。おもに南西側の周濠を掘って出た土を盛って古墳が築かれました。

巨大な周濠
 南西側には最大幅13m、深さ4mの巨大な濠（周濠）が見られます。南東側にも浅い濠があり、その間が通路状に途切れています。

先進地の古墳築造技術
 古墳の造り方には墓内の古墳と共通するところがあります。古墳に埋葬された豪族が墓内と関係を持っていた可能性が推測されます。

墳丘
 斜面中ほどに幅4～5mの広い平坦面（テラス）が走る2段築成の円墳です。



性格
 蒲原平野の各地域の豪族が共同して推したた王の墓であった可能性が考えられます。

時代
 周濠から出土した土器や墳丘の築造方法などから古墳時代中期（約1600年前）に造られたと考えられます。

復元整備
 2011～2013年にかけて行った確認調査の成果に基づいて、2013年から2014年に復元整備工事を行いました。古墳を保護するために全体を1mの保護盛土で覆っています。

頂上部
 古墳の頂上部は、平安時代方形の周濠が掘られ、杭列などが確認され、遺物も多く出土しました。杭列からは建物群を柵で囲っていた状況も推測されます。

すばらしい眺め
 古墳の頂上からは新潟市街地はもとより、戸倉山・角田山・佐渡島まで見渡せます。

弥生時代の環濠
 古墳の周囲にある環濠は弥生時代の環濠を示しています。古墳の下には弥生時代の竪穴住居などが多数見つかっています。

古代の製鉄遺跡
 古津八幡山遺跡の麓から種物園にかけて、奈良時代から平安時代の製鉄に関係する遺跡が多数見つかっています。「金津」の地名の由来です。



古津八幡山古墳を造った豪族の屋敷
 — 舟戸遺跡 —

古津八幡山古墳の盛土の下や周辺では、弥生時代後期・終末期（1世紀～3世紀中頃）の竪穴住居が63棟も見つかっていますが、古墳時代の建物はなく、その頃の集落は丘陵の麓にあったと考えられます。

古津八幡山古墳を造った豪族の屋敷は、古津駅周辺の舟戸遺跡が有力です。古墳時代の拠点的な集落で、1993年の発掘調査では、今から1600年ほど前の古墳時代中期の竪穴住居や掘立柱建物、杭列などが確認され、遺物も多く出土しました。杭列からは建物群を柵で囲っていた状況も推測されます。

今後の調査・研究によって遺跡の内容を明らかにしていく予定です。

竪穴住居

舟戸遺跡出土土器

一六〇〇年の時を越えよみがえる蒲原の王墓



方形周溝墓
 （全長3m）約1900年前



前方後方形周溝墓
 （全長13m）約1750年前



古津八幡山古墳
 （直径60m）約1600年前

墓の移り変わり
 古津八幡山遺跡では、弥生時代には四角い墓、古墳時代になると円い墓が造られました。規模も時代が新しくなるにつれて大きくなっていきました。

墓に埋葬された人物がそれだけ、力を蓄えていった結果ではないかと考えられます。

国指定史跡 古津八幡山遺跡